『ユリシーズ』第16挿話の考察

2022.2.27.ぬしろ かずや

第16挿話のトピック

- ブルームにより繋がれるスティーブンとモリー
- パーネルの不義・失脚と自らの現状を重ねるブルーム
- 自意識の強い語り手の存在
- スティーブン、ブルームとアイルランドとの関係
- 偽りの『ユリシーズ』＝船乗りマーフィの物語

・・・・

偽りの『ユリシーズ』＝船乗りマーフィの物語

- サイモン＝ディーダラスのストックホルムでの銃のエピソード(U-Δ,16,34-37)
- 中国～南米～ロシアと世界を股にかけた大冒険(U-Δ,16,40)
- ペルー発の絵葉書の宛名(U-Δ,16,40)
- 馭者溜まりで出されるとてもコーヒーとは呼べない代物(U-Δ,16,61)
- 名前など意味がないと語るスティーブン(U-Δ,16,34)
- 写実的な嘘をつく《テレグラフ》ピンク色最終版(U-Δ,16,88)
- ディグナムの会葬者名簿にあるスティーブンとL・ブーム(U-Δ,16,90)

第16挿話には複数の「偽わりの物語」が散りばめられている

ホメロス問題について

ところで・・・

Homeric Question

From Wikipedia, the free encyclopedia

The **Homeric Question** concerns the doubts and consequent debate over the identity of Homer, the authorship of the *Iliad* and *Odyssey*, and their historicity (especially concerning the *Iliad*). The subject has its roots in classical antiquity and the scholarship of the Hellenistic period, but has flourished among Homeric scholars of the 19th, 20th, and 21th centuries.

Rembrandt's *Homer* (1663)

The main subtopics of the Homeric Question are:

- "Who is Homer?"[1]
- "Are the *Iliad* and the *Odyssey* of multiple or single authorship?"[2]
- "By whom, when, where, and under what circumstances were the poems composed?"[3]

To these questions the possibilities of modern textual criticism and archaeological answers have added a few more:

- "How reliable is the tradition embodied in the Homeric poems?"[4]
- "How old are the oldest elements in Homeric poetry which can be dated with certainty?"[5]

Contents [hide]

1 Oral tradition
2 Time frame
3 Identity of Homer
4 Current status of the Homeric Question
5 See also
6 Notes
7 References

『ユリシーズ』の下敷きである『オデュッセイア』は
その成り立ち、信憑性に関して幾つかの問題を含んでいる

偽りの『ユリシーズ』＝船乗りマーフィの物語

<u>エウヘメリズム</u>

紀元前4世紀のギリシアの哲学者エウヘメロスによる、ギリシア神話とはかつての権力者が死後神格化されたもので、歴史上の出来事が歪曲されて伝わったものであるとする理論

神話とは得てして誇張されたものであるが、マーフィの語る物語がそのまま後世へと伝わった場合(＝読者がテキスト通りに内容を受け取った場合)それは英雄譚・神話として語られるのでは？

(個人的な)第16挿話の主題

・「偽りの物語」が散りばめられている第16挿話では神話や英雄譚の成り立ち・信憑性に関して問題提起をしている。

・今回は、『ユリシーズ』の下敷きである『オデュッセイア』に関して

-世界最古の物語をホメロスは如何にして作ったのか？

-『オデュッセイア』は如何にして神話となったのか？

について考えることで物語と神話との関係性に迫る。

参考図書紹介

試し読み

この画像を表示

トロイア戦争:歴史・文学・考古学 単行本 – 2021/2/27

エリック・H・クライン (著), 西村 賀子 (翻訳)

★★★★☆ 9個の評価

すべての形式と版を表示

Kindle版 (電子書籍)	単行本
￥2,475	￥2,750
獲得ポイント: 25pt	獲得ポイント: 28pt

今すぐお読みいただけます: 無料アプリ

￥4,040 より 5 中古品
￥2,750 より 36 新品

3000年以上前の戦いの真相を求めて

はるか昔、トロイア戦争の伝説を生み出した紛争があったのだろうか? あったとすれば、いつ、どこで? 古代ギリシア人・ローマ人はこの戦いを事実と信じたが、中世から近世にいたる学者たちはより懐疑的で、叙事詩が歴史的事実に基づいていた可能性が本格的に注目されたのは、1870年代のシュリーマンによる発掘以降のことだった。以来、多くの発見がなされたが、謎はいまだに残る。
本書は、トロイア戦争に関連する三つの分野の研究成果――ホメロス叙事詩と「叙事詩の環」などの文学資料、ヒッタイト文書という歴史学資料、ヒサルルック遺跡からの考古学資料――を渉猟し、多角的・総合的に検証する。叙事詩が語る戦いの細部は、青銅器時代つまりトロイア戦争が起こったとされる時代のものか、鉄器時代つまりホメロスの時代のものか。トロイアの支配者たちはヒッタイト文書にどのように記録されているか。巻末に、ヒッタイト文書の内容紹介、シュリーマン以前のトロイア発掘の試み、現在なお残る謎・問題点をまとめた、訳者による解説を収録。
^ もっと少なく読む

本の長さ	言語	出版社	発売日	ISBN-10
216ページ	日本語	白水社	2021/2/27	4560098255

歴史・文学・考古学の３つの視点から「トロイア戦争」の謎に迫る最新の研究書

ホメロス問題：作者の正体は？

トロイア戦争の裏付けとなるギリシア文学の証拠を研究する現代の学者はたいてい、「ホメロス問題」として知られるものに関心を寄せている。(中略)そのうち最も重要な問は「ホメロスは実在したか？」、「ホメロスの『イリアス』と『オデュッセイア』の中の情報は青銅器時代(トロイア戦争が起こったとされる時代)か、鉄器時代(ホメロスが生きていた時代)か、あるいはその中間のどこかを反映しているのか？」である。

(トロイア戦争　歴史・文学・考古学　61頁)

ホメロス問題：作者の正体は？

　ホメロスとその生涯については実際のところ、よくわかっていない。古代人はホメロスを、口誦詩人ー過ぎ去った時代の英雄の事績を歌いながら各地を旅する吟遊詩人ーとして極めて高く評価した。(中略)

　他方、ホメロスは単一な個人ではなく少なくとも二人いたとも主張されてきた。実際、『イリアス』と『オデュッセイア』を書いた人々はそれぞれ別々だったと、とくにドイツの学者たち(なかでも一七九五年にフリードリヒ・アウゲスト・ヴォルフ)によって長年考えられてきた。

(トロイア戦争　歴史・文学・考古学　62-63頁)

ホメロス問題：作者の正体は？

　おそらく、最もおもしろく、極めて妥当でもあるのは、ホメロスとは特定の個人ではなく、なんと専門職のことだったいう提唱である。すなわち。「ホメロス」という名の人物がいたのではなく、生活のためにトロイア戦争の叙事詩を歌いながら各地を旅する口誦詩人が「ホメロス」だったというものでる。もしそうだとすれば、紀元前八世紀に新しい書字体系が広く使えるようになったときに、ひとり以上のこういう専門職の口誦詩人がこの口誦版を書き記したのかもしれない。

(トロイア戦争　歴史・文学・考古学　64頁)

ホメロスは『オデュッセイア』を如何にして作ったか

　十年間の争いを軸に繰り広げられる感動的な叙事詩を作り上げるために、ホメロスが人と事件を圧縮し、何世紀にも及ぶ断続的な戦争も圧縮するという文学的自由を行使した可能性は、十分にあると主張する人がいるかもしれない。彼の詩は史書としてではなく、愛と名誉のような普遍的主題に関連して人々が誇りに思う叙事詩としてあるはずだ。

(トロイア戦争　歴史・文学・考古学　150頁)

ホメロスは『オデュッセイア』を如何にして作ったか

　ホメロスは事実を把握していなかったかもしれないし、気にかけなかったかもしれない。結局のところ、中世以降の最も偉大な叙事詩人や叙事詩の一部のものは、私達が知っているように、歴史的事実を変更してきた。そして偉大な英雄伝説というものは往々にして、あまり重要でない事件か、あるいは原型をとどめないほど歪められたできごとをめぐって作られるのだ。『ローランの歌』と『ニーベルンゲンの歌』がいい例で、どちらも「実際に起きた歴史的事件の細部に変更を加えた」。

(トロイヤ戦争　歴史・文学・考古学　152頁)

『オデュッセイア』は如何にして神話となったか

ゼウスやヘラなどの神々が戦争に関与する場合はとくに、現実と幻想の境界線があいまいかもしれないし、一部のささいな点にけちをつけるかもしれないが、全体的に見れば、トロイアとトロイア戦争は北西アナトリアという、まさにあるべき場所にある。(中略)

さらにその上、愛や名誉や戦争、親族、社会の掟といった、後代ギリシア人と後続のローマ人の大きな共感を呼んだ永続的な主題は、アイスキュロスとソポクレスとエウリピデスから、ウェルギリウスとオウィディウスとリウィウスを経て、チョーサーやシェイクスピアやその先々までの時代を超えて共感を呼び続けてきた。それゆえにこの物語は、もともとの事件もしくはそのバリエーションが生じてから三千年以上も経っているのに、今日なお多くの人々を魅了するのである。

(トロイア戦争　歴史・文学・考古学　158頁)

「永遠に語り継がれること」が物語を神話へと昇華させるための条件なのかもしれない

現代の神話：『ユリシーズ』

ジョイスは『ユリシーズ』に関して、1921年の末、ジャック・ブノウ=メシャンに次のような警句を残している。

非常にたくさんの謎やパズルを埋め込みましたから、わたしの意図したことをめぐって大学の先生がたは何百年もの間忙しく議論してくれるでしょう。そうすることで不滅でいられるわけですから。(「ユリシーズ」の謎を歩く　結城英雄著　15頁)

『オデュッセイア』は華やかで興奮に満ちた物語が時を超えて人々を魅了し神話となった。一方、ジョイスは『ユリシーズ』に多くの謎を残し後世の人々に永遠に謎解きをさせることで「現代の神話」を作ろうとしたのかも知れない。

そして・・・出版から百年経った今日、私たちは彼の術中にはまっているのである。